

IV 北海道の児童生徒の体力向上 に向けた有識者の意見

ここでは、全国体力・運動能力、運動習慣等調査における本道の実技調査及び質問紙調査の結果を踏まえた今後の取組の方向性について、有識者からいただいた意見を掲載しています。

各市町村教育委員会及び学校においては、本意見を参考にして、今後の取組を企画・立案いただくなど、児童生徒の実態に応じた体力向上の取組の充実に向け、御活用ください。

体育・保健体育授業の授業改善と子供の体力向上

北海道教育大学札幌校

教授 中 島 寿 宏

○体育・保健体育の授業改善と体力向上の関係

体育・保健体育の授業を担当する先生たちは、子供たちに運動やスポーツに親しんでほしいと考えていることと思います。学習指導要領においても、体育・保健体育の目標は「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」と示されており、先生たちは子供たちが授業の中で成長し充実感を得ながら運動・スポーツを好きになってもらいたいと考えて授業づくりをしていることでしょう。子供たちが運動・スポーツに親しむことによって運動する機会が多くなり、結果として体力の向上につながっていくものと考えられます。

実際に、文部科学省が示した令和 4 年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査の分析結果においても、運動やスポーツが好きという意識を持つ児童・生徒や運動する時間の多い児童生徒は、体力合計点が高いことが報告されています。また、体育・保健体育の授業の中で友達と関わりながら、できないことができるようになったり、工夫して挑戦したりする楽しい経験が運動好きを育むことや、学校を卒業した後も豊かなスポーツライフを切り拓く契機となることについて指摘されています。

それでは、北海道の状況はどうなっているのでしょうか。北海道教育委員会が令和 4 年度の調査データを分析した結果、体力ポイントについては小学校児童では男女いずれも全国との差が縮まっている傾向が見られました。種目によっては全国平均を上回るものも見られるようになってきています。道教委が推進している小学校体育専科教員・小学校体育エキスパート教員の配置をはじめとする取組の成果が、体力ポイントの結果としても成果につながってきていることが窺えます。また、「運動やスポーツをすることが好き」、「体育（保健体育）の授業は楽しい」と回答した児童生徒の割合は、小・中学校男女いずれも全国平均より高いポイントを示していました。北海道の子供たちが体育・運動に前向きであることが窺える結果だと感じます。しかし一方で、「体育（保健体育）の授業で目標（ねらい・めあて）を意識して学習すること」、「友達と助け合ったり、教え合ったりして学習すること」によって「できたり、わかたりする」と回答している児童生徒は小・中学校男女いずれも全国平均より低い傾向にあることも報告されています。特に中学校女子ではこの傾向が強く表れており、体力ポイントについても中学校女子が全国を上回る種目はありません。学校としての回答では、体育・保健体育授業において「目標を示す活動を取り入れている」ことや「学習したことを振り返る活動を取り入れている」という項目は全国平均よりも高くなっていますので、体育・保健体育を担当されている先生たちの意識は高いことが窺えますが、学習活動として子供たちの意識も高まっていくにはもう少しの時間と、さらなる授業改善が必要になるのかもしれない。

○体育・保健体育の授業力向上につながる5つの要素

体育の授業が上手な先生はなぜ授業力を高めてこられたのでしょうか。これまでの我々の研究室での熟練教師を対象とした調査・分析では、体育授業が上手な先生たち共通する要素として、①子供たちをよくみて子供たちの視点から授業をとらえている、②他の先生の授業を多くみてきている、③自身の授業を

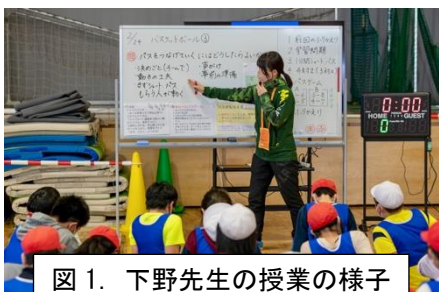


図 1. 下野先生の授業の様子



図 2. ICT の効果的な活用

他の先生たちにみてもらってきている、④自身の授業について省察（リフレクション）している、⑤授業がよくなることを楽しんでいる、という5つの要素が抽出されました。これら5要素は単独で経験されるのではなく、教師の中で相補的に関連しながら授業力が向上しているようです。例えば、岩見沢市立南小学校の下野里紗先生は素晴らしい体育授業を実践されていますが、授業後のインタビューでは自身の授業をよく省察していることや子供たちの学習が深まることを楽しんでいる姿がありました。特に印象に残ったのは、「授業実施前に作成した体育の指導案を、授業後に書き直して残すことがあります」という言葉です。自身の授業を省察し、授業での気づきを次に活かすことで、下野先生は授業力を高めてこられたのだと感じました。

○北海道でのオンラインでの授業共有の取組

令和4年度は、北海道教育委員会・各教育局・各学校・大学が連携して、授業実践や各校での取組事例をオンラインで共有する取組を行いました。北海道内の先生たちが各学校で取り組まれていることがオンライン上に集積・共有されています。また、コメント機能の活用で相互に意見の交流なども可能です。これまで、北海道はその広域性の問題から、先生たちが研修参加や授業見学の機会を得ることが難しいという課題がありました。オンラインでは先生たちが可能な時間にアクセスして動画や資料を閲覧したり、全道各地の先生たちとやりとりしたりできるため、「授業をみる」、「授業をみてもらう」、「授業を省察する」といったことが実施しやすくなります。このような試みが今後の北海道の体育・保健体育の発展につな



図 3. 美瑛町立美瑛小学校・植村先生の授業



図 4. 幌延町立幌延中学校・八鍬先生の資料

がることを期待しています。

子どもたちの体力向上に向け、チーム北海道として組織的な取り組みを！

北海道教育大学旭川校

教授 高瀬 淳也

令和4年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果を見ると、北海道は全国平均よりも数値の低い種目がいくつか見られました。しかし、私は「実際はもっと高いのではないか」という期待を抱いています。多くの学校で体育授業を拝見した限り、元気いっぱい一生懸命に取り組む子どもたちの姿を見ると、「本当にそんなに低いのかな…」と感じずにはられません。私は、調査で行われる新体力テストにおいて、子どもたちが本当の力を発揮できていない可能性があると考えています。この点は、多くの先生方も同じように感じているのではないのでしょうか。

北海道教育庁学校教育局健康・体育課が発行する METs の第 38 号には、檜山管内の厚沢部町立厚沢部小学校の「体力向上」の 3 つの取組が掲載されていました。「新体力テストの各種目のワンポイントアドバイス」には、実に端的に各種目について書かれています。体育授業に一生懸命取り組まれている先生方にとっては当たり前の内容に見えるかもしれませんが、それを実際に指導しているかと問われると、自信をもって「はい」と答えられるでしょうか。私が小学校教員の時には、子どもたちには申し訳ないのですが、限られた時間で効率的に新体力テストを実施することに注力し、このような指導をすることはありませんでした。しかし、20m シャトルランにおいて、一人の子が走り終わると周りの子たちもそれに合わせるかのように走り終わってしまう光景を見ると、「もっと頑張れるはずなのに」とも感じていました。もし、当時の私がワンポイントアドバイスである「ラスト1回をダッシュ」と声を掛けていたら、子どもたちの意欲が高まり、より頑張れたのかなと思います。

厚沢部町立厚沢部小学校のもう1つの取り組みとして、「学校・家庭・地域が一体となった組織的な取組」が紹介されていますが、これも大変興味深いものがあります。この取り組みでは、体力向上に向けた年間計画が作成されており、いつ、どのような取り組みを行うかが具体的に示されています。また、家庭・地域と連携した生活習慣の改善やアウトメディアなども年間計画に組み込まれており、学校・家庭・地域の組織的な取り組みが目指されていることがわかります。このような組織的な取り組みを推進することで、子どもたちは日々の学校生活や家庭生活の中で適切な運動習慣を身につけていく

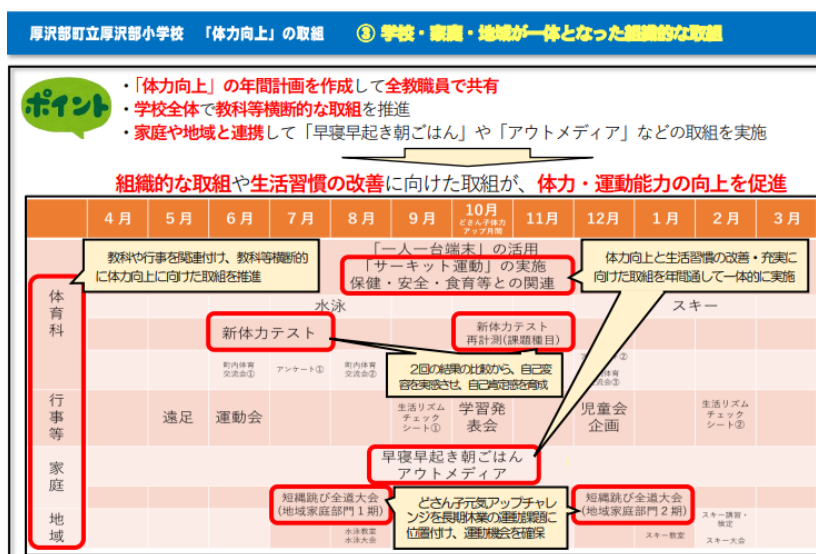


図1 北海道教育庁学校教育局健康・体育課 METs 第38号



図2 ちゃれんじ NO.2 (忠類学園保健体育通信)

体が子どもの成長を支える役割を果たす必要があるという意味が込められていると思います。このことは、子どもたちの体力向上にも同様のことが言え、先生方をはじめ、家庭や地域、社会全体で協力して、組織的に取り組んでいくことが重要と言えます。

これまで、先ほど紹介した北海道教育庁学校教育局健康・体育課が配信する METs をはじめ、体育専科・エキスパートの先生方の実践報告集や体育授業の動画など、子どもたちの体力向上に向けた様々な情報が発信されています。これらの資料は、誰でも活用することができ、内容も大変充実しております。私自身も大学の講義で学生に指導する際の参考資料として、いつも活用させていただいています。ぜひ、先生方だけではなく、家庭や地域でも活用いただき、チーム北海道として子どもたちの体力向上に向けて組織的に取り組んでいくことができるよう、お声かけをしていただけたらと思います。

今後ともお力添えをどうぞよろしくお願い致します！

ことが大いに期待できます。

十勝管内の澤辺渉先生は、図2のような通信を作成し小・中学校の子どもたちに配布しています。通信では、低学年でも読めるように振り仮名も振られています。昨年度は、全部で20号を発行したそうです。運動会や体育祭が近い時期には速く走る方法について、水泳授業の時期には泳ぎ方の他に着衣泳を実施する意図などについても書かれており、時期に合わせて記事の内容が工夫されています。おそらく、この通信をきっかけに学校、家庭、地域の組織的な取り組みへと発展していくことも考えられ、こちらは大変素晴らしい取り組みだと思えます。

「学校だけで子どもを育てる時代は終わった」という言葉が、一時期よく耳にしました。この言葉には、学校だけが子どもの教育を担うのではなく、家庭や地域、社会全体

